

トラック 14-1

一人のスルタンがいた。このスルタンには一人娘がいた。彼はその娘を成長するまで育てた。娘が大きくなった時、スルタンは彼の町の人々の前で宣言した。

「お前たちの中のどの男も、わが娘と寝ることは出来ないだろう。それが出来た者には、黄金の半分と銀の半分を与える」。

イブナシワの耳にもこの知らせが入った。数日後イブナシワはジャックの実を集めに出かけた。熟していないジャックである。彼はそれを[スルタンの]館の前まで持って行った。

「さあさあ、熟していないジャックの実はいらんかなー」。「熟していないジャックの実はいらんかなー」。

彼はさらに進んだ。誰も彼に気を留めなかった。彼はもう一度それを持って、

「さあ、熟していないジャックの実、熟していないジャックの実！ 誰も熟していないジャックの実はいらんのかい！」。

誰も彼に気を留めなかった。人々が言った。

「熟れたジャックの実を売ってないんだから、熟れてないジャックの実なんか何になる」。

彼はそこにいた衛兵に近づいて言った。

「スルタンがこの熟していないジャックの実を買ってくれるかどうか、中に入れておくれよ」。

そこで衛兵は答えた。

「スルタンはお前の首を刎ねるだろう。スルタンは熟れたジャックの実も買わないのに、わざわざ熟していないジャックの実を買うなどとお前は本当に信じているのか」。

「入れさせて、やらせておくれよ」。

イブナシワはそういうわけで宮殿に入り、スルタンの許に進み出た。

「おお、スルタン閣下、ご挨拶を申し上げます。」

「何だ？ お前は何が望みだ？ サラーム、お前は何をしにここまで来たのだ？」。

「私はジャックの実を持ってまいりました。あなたが召し上がられるように」。

「どんなジャックの実だ」。

「熟していないジャック」。

「とにかく、我々は熟れたジャックの実さえ食べないのに、熟れてないものが何になる」。

彼はお願いをした。

「それでは、ここで私に何か仕事はありませんか？」。

「間に合っている。悪いが帰ってくれ。便所掃除なら出来るが」。

というわけで、イブナシワは中に入り、働き始めた、

便所の中で箒をはき、便所を片付け、スルタンの館にどうやってもう一度入るかを知るために、辺りに目を配った。

最初の日、2日目、3日目、4日目と経ち、スルタンはイブナシワがきれい好きであることを認めて、便所において置くのは正しくないと考えた。

「こういう人間は食べ物を扱うべきだろう」。

イブナシワは、食事の仕事をするために館の中に遣わされた。こうやってイブナシワは入ることが出来た。彼はスルタンの食事を作り始めた。彼が館に入ることを許されてから3日目に彼は言わ

れた。

「今後は、お前が娘の食事を彼女の部屋に運ぶ担当の係になる」。

イブナシワが館に来てから2週間が経った。

ある日、中庭で扇ぎながら休んでいた。スルタンの部下の一人、門衛の一人が彼に言った。

「あんた、館に入れてもらったし、仕事を見つけたからには、調子はどうかとか教えないわけにはいかないだろう。名前だけでも教えるとか」。

彼は、門を守っている衛兵たちに言った。

「僕の名前ねえ、ワレワレ[一人称複数]というのが僕の名前だよ。ワレワレというんだ」。

「ああ、そうか」。

「どうも」。

「スルタン閣下、私の名前はとても汚いので、お伝えするわけにはいきません」。

「結局のところ、お前はなんという名前なのだ？」。

「私はペニスといいます。でもお願いですから繰り返さないで下さい」。

「言わないでおこう」。

ある日、スルタンの娘の食事を運んできて彼はおしゃべりを始めたが、それは長く、長くなった。

スルタンの娘は最後に彼に尋ねた。

「ところで名前はなんて言うの？」。

「私はミジクノジャックといいます。」

「お前はミジクノジャックという名前なのね？」。

「はいそうです」。

その数日後に、スルタンの妻が彼に尋ねた「お前の名前はなんと言うの？」。

「実は、私はワレメと言います。でもお願いですから繰り返さないで下さい」。

こんな感じでしばらく過ぎた。

ある日、イブナシワがスルタンの娘とおしゃべりをしている時、話題が男と女の関係になった。

「それじゃ、君は今までしたことがないんだね？ 一度も？」。

スルタンの娘はその通りで、今までしたことがないと答えた。

イブナシワは尋ねた。

「そういうことを僕が君に教えるというのはどうだい？」。

少女は何の問題もないと答えた。

「そうしたいなら、私に教えてくれてもいいわよ」。

2日後イブナシワはスルタンに言った。

「ジャックの実はもう熟したはずですよ」。

「それでは確かめよう」。

彼はスルタンに「昼食のデザートに実を食べられるでしょう。」と言った。

「それから、あなたのお嬢さんも一緒に食卓に着いて下さると有難いのですが。と言うのも、そうすれば今日は彼女の部屋に食事を運ぶ必要がなくなります。」

「何の問題もない」。

スルタンは娘に会いに行った。

「今日の昼、お前は自分の部屋で食べなくてもいい。みんなで一緒に食事をしよう」。

「構わないわよ」。

ということで彼らは食事を一緒に食べた。食事を終えてデザートに取り掛かったところで母親が娘に言った。

「余りたくさん食べないように。ジャックの実はお腹をこわすから」。

しかし娘はやめなかった。彼女はジャックの実を食べ続けた。というのもそれはとても甘かったからで、彼女は食べに食べた。

昼食が終わって夜になると、イブナシワは夕食を少女の部屋に運んだ。

「これから、僕らが話したあのことを君に教えられるよ。今夜の6時だけど窓は閉めないように。というのも、こういうことを夜の7時にやるには涼しい空気があった方がいいので」。

娘はそれに従った。6時半になるとイブナシワは娘を触り、愛撫を始め、ついに彼女と交わった。

娘は痛がって、イブナシワが教えた名前を叫んだ

「ミジクノジャック」。

彼女は叫んだ。

「おかあさん、痛い。ミジクノジャックが私に痛いことする」。

母親は言い返した。

「でも私が言ったでしょう。それなのにあなたがいうことを聞かなかったんだから。そこで一人で死んでしまいなさい」。

「おかあさん、ミジクノジャックが私に痛いことするの、おかあさん、おかあさん」。

母親は起き上がって父親に言った。

「あなたの娘が、熟していないジャックが痛いことをしていると言っていますよ」。

「放っておきなさい。沢山食べてはいけないと言われたのに、あの子は言う事を聞かなかったのだから」。

こんな具合が続いて、母親は思った。

「大変、起きなくては。ジャックの実というわけじゃないように思えるわ」。

その場にいて、彼女は娘のお腹の上のイブナシワを見つけた。

母親は動転してどうしたらいいかわからず、父親の助けを呼んだ。

「おとうさん、早く来て」。

「一体何があったんだ？」。

「ワレメが私たちの娘の下腹の上にあるわ！」。

父親は答えた。

「黙れ、そこにあるのが普通だということ知らないのか。お前はそいつを見たことがないのか？」。

「そこを離れなさい。そこが普通の場所なんだ。お前はそいつを見たことがないのか？」。

イブナシワは急に起きて窓から飛び降り、外に降り出た。

イブナシワはスルタンに名前がペニスだと言っていたので、スルタンが言った。

「ペニスをつかまえろ」。

それで(衛兵の)全員がペニスをつかんだ。

「スルタンの命令だからどうしようもない。自分のペニスをつかむのだ」。

そこに穴があった。イブナシワは門を守っていた連中をそこに押し込んでから門を乗り越えて逃げ出した。スルタンは降りてきて言った。

「私がお前たちに命令したのは、ペニスをつかまえることだったのに、みんな自分たちのペニスを挿んでしまった」。

というのも、イブナシワがスルタンに教えた名前がそれだったからである。

スルタンは門に近づいて、その穴底に衛兵たちがいるのを見つけた。

「一体、誰がお前たちをその中に押し込んだのだ？」。

「ワレワレが、我々を穴に押し込めました」。

というのも、イブナシワが彼らに教えた名前がそれだったからである。

イブナシワは既に逃げ出し、門を乗り越えていた。

2 日後、スルタンはラッパを鳴らさせ、ガジジャのすべての住民が集まった。スルタンはことの次第を述べてイブナシワを呼びにやり、彼を娘と結婚させた。この話はここでおしまい。